

平成24年度 自己点検・評価の内容

4年制博士課程を設置する各大学は、平成24年度は以下の点について、自己点検・評価を行い、その内容を次ページ以下の様式により、8月31日までにホームページで公表するとともに、そのURLを薬学系人材養成の在り方に関する検討会へ報告するものとする。

作成に当たっては、理念とアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの一貫性に留意すること。

- 理念とミッション
- アドミッションポリシー
- 受験資格
- 入学者選抜の方法
- 入学者数(平成24年度)
- カリキュラムポリシー
- カリキュラムの内容
 - ・ シラバス
 - ・ 教育課程等の概要(別紙様式第2号)
 - ・ 履修モデル
- 医療提供施設との連携体制
- 学位審査体制・修了要件
- ディプロマポリシー
 - ・ 養成する人材像

自己点検・評価 様式

大学名:金沢大学

研究科・専攻名:医薬保健学総合研究科・薬学専攻

入学定員:4名

○ 理念とミッション

本専攻のミッションは、医療関連の知識、思考、技術、および研究能力を高いレベルで持ち、臨床の現場で課題を解決することのできる薬剤師ないしは薬学研究者を養成することにある。この目的を達成するために、学生には臨床関連科目の習得および臨床関連の研究課題の実施と学位論文の作成を義務付ける。これにより、高度な専門知識と問題解決能力、職業倫理と責任感、コミュニケーション・表現能力、さらには研究能力が培われ、医薬保健学領域の教育と研究、医薬品関連の行政、ならびに医薬品開発から臨床評価までの現場で活躍する人材が育成される。

自己点検・評価:本専攻の理念とミッションは、「薬学系人材養成の在り方に関する検討会」が提言する4年制博士課程の主たる目的“医療の現場における臨床的な課題を対象とする研究領域を中心とした高度な専門性や優れた研究能力を有する薬剤師などの養成に重点をおいた臨床薬学・医療薬学に関する教育研究を行う”に合致しており、本専攻においては社会が求める人材が養成される。

○ アドミッションポリシー

本専攻では、薬学を中核に据えた医療系学問分野における最先端の知識、医療人としての実践的な研究能力、および高い倫理観の醸成を目的とする。そのために、薬学・医学・保健学という三つの医療系学問分野が横断的に連携した医薬保健学総合研究科に特有の学際的環境の中で、基礎から臨床にわたる幅広い薬学分野での教育と研究を実施する。本専攻における主たる入学者は薬学系部局で6年間の学士課程を終えた者であるが、他部局で修士課程あるいは博士前期課程を修了した者をも対象とする。本専攻のカリキュラムには導入からアドバンスまで階層化された多くの科目が配置されており、6年間の薬学系学士教育を経していない学生においても連続性をもって本専攻での教育につながるよう配慮されている。修了生が就く職業は、臨床現場において指導的役割を果たす薬剤師、医療薬学教育・研究をリードする薬系大学教員、医療・厚生・薬事・環境等の行政担当者、および新薬開発や臨床試験等に携わる研究者などが見込まれる。本専攻では、薬学領域における臨床関連の知識、技術、および研究能力を高め、前出の職業に就くことを希望する者を受け入れる。

○ 受験資格

一般的な受験資格である6年制薬学部を卒業した者(卒業見込みを含む)及び旧薬学教育課程の修士課程を修了した者で薬剤師免許を有している者を除き、貴学の受験資格について該当するものに○を付すこと(複数回答可)

- ①. 6年制課程(医学部、歯学部、獣医学の学部)を卒業した者
- ②. 外国において学校教育における18年の課程(最終の課程は、医学、歯学、薬学または獣医学)を修了した者
- ③. 修士課程を修了した者(薬科学)
- ④. 薬学以外の修士課程を修了した者
- ⑤. 旧薬学教育課程の学部を卒業した者(学力認定※)
- ⑥. その他(学力認定) ※大学院において、個別の入学資格審査により、6年制の大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達した者

上記項目4に係る入学者ならびに薬剤師免許を持たない者を対象とする人材養成について:

本専攻を修了後に薬剤師を職業とすることのない者については、医療薬学教育・研究をリードする薬系大学教員、医療・厚生・薬事・環境等の行政担当者、新薬開発や臨床試験等に携わる研究者などとなるような人材に養成する。

上記項目5および6に係る審査基準について:

以下をおよその基準として、研究歴および研究業績を総合的に考慮して受験資格の有無を判定する。

(1) 実務経験または研究歴: 次のAまたはBのいずれかに該当することが必要

A. 薬剤師等の医療に携わる仕事を主たる業務とした経験、もしくは薬剤師研修生としての活動歴が通算で2年間以上あること。なお、経験年数は所属機関、職位、業務内容等を考慮して総合的に算定する。

B. 研究・開発を主たる業務とした経験が通算で2年間以上あること。なお、経験年数は所属機関、職位、業務内容等を考慮して総合的に算定する。また、博士前期課程または修士課程を中退した者の在学期間は経験年数に加えることとする。

(2) 研究業績

上記(1)のBに該当する者にあつては、申請者が主体となった学術論文、特許、総説、紀要、データベース、出版物、研究発表等を有することが必要とされる。

○ 入学者選抜の方法

学業成績証明書の書面審査および以下の2つの学力検査を実施し、それらの結果を総合的に考慮して合否を判定する。

1. 筆記試験

外国語（英語）

2. 口述試験

入試委員に対して、卒業論文、研究又は開発業務等の概要、修士論文のいずれかの内容に関する口頭発表と質疑応答を行う。なお、本学薬学類を卒業見込みの受験者については、別途に口述試験のみを課す。

自己点検・評価：本専攻の入学者選抜の方法は、語学力（英語）と発表能力を重視したものである。これは、高度な知識と技術を持った薬剤師養成に必要な要素をカバーすると同時に、薬剤師資格を持たない入学希望者の選抜にも配慮したものである。

○ 入学者数(平成24年度)

定員4名のところ7名が入学した。受験資格（ページ3）ごとの内訳は、資格1（5名）、資格2（なし）、資格3（なし）、資格4（1名）、資格5（1名）、資格6（なし）、であった。

○ カリキュラムポリシー

本専攻のカリキュラムは、薬学関連科目のみならず薬学と深く関連する最新の医学系学問を幅広く学ぶことを可能とし、先進的薬物療法に資する医療薬科学を統合した教育・研究につながる構成となっている。具体的には、薬学と関連する最新の医学系学問を学ぶことができる「初期総合カリキュラム」、薬学とは異なる分野の知識習得を奨励する「フロンティア医学セミナー」、そして学会への積極的参加を促すために学会発表を単位化した「学際医学セミナー」を設ける。一方、薬学系教員が担当する「薬学専攻選択科目」（「医薬科学」10科目）においては、薬剤師としてのキャリアパスを考慮したうえでの最先端の知識を教授して、臨床現場での実践的な活動および学術的な知識や研究能力の修得をめざす。さらには、所属研究室で行われるセミナーまたはカンファレンスで学習する「研究分野別特論」、学位論文作成を目的とする「医薬科学特別研究」、ならびに学会発表等について実践的な演習を行う「医薬科学特別演習」が必修となっており、学生個々の専門学問領域における最新の研究課題に取り組むことができる。

なお、すべての科目について導入からアドバンスまで階層化がなされており、薬学関連の知識に不安がある学生でも段階的に学習できるよう配慮がなされている。

○ カリキュラムの内容

本専攻のカリキュラムの特徴は、薬剤師が医療関連の知識、思考、技術、および研究能力を養うのに必要な専攻独自の科目群を配置していることにある。さらに、同じ研究科の他専攻において開講される授業を履修して単位取得することもできる。すなわち、「初期総合カリキュラム」と「薬学専攻選択科目」（科目区分「医薬科学」を除く）の単位充足においては、医学博士課程の科目を履修して、医師の観点から解説される最新の学問を学ぶことができる。

【初期総合カリキュラム：4単位】

薬学専攻独自の科目に医学博士課程科目を併せて32科目が用意されている。なお、実践英語能力を身につけるための「基礎系教育セミナー」および薬学に必須のレギュラトリーサイエンスに関する知識習得を目的とした「レギュラトリーサイエンス特論」（各2単位）の履修を義務付けている。

【薬学専攻科目：12単位】

薬学系教員が担当する科目を「医薬科学」科目群（10科目20単位）として、本専攻の学生に履修を推奨している。これら科目では、薬剤師としてのキャリアパスを考慮して臨床現場での実践的な活動ならびに学術的な知識や研究能力を体系的に修得することができる。例えば、「薬物代謝毒性論」では薬物代謝に関する最新情報とともに研究アプローチと考察力を身につけ、「臨床薬物動態学」では臨床実例を取りあげて副作用発現に薬物動態情報を活かす方法を学ぶ。

【研究分野別特論：12単位】

受講生は、所属する研究室におけるカンファレンス、セミナーあるいはシンポジウムに参加する。高い専門性をもつ学問の習得が目的である。

【所属専攻以外が開設する科目：2単位】

本科目では、自分の専門分野以外の幅広い知識の修得を目指して、学内外で開催される講演会などへの出席を単位化している。「学際医学セミナー」では学会等での発表・討論能力の研鑽を求めている。

【医薬科学特別研究および演習：各2単位、計4単位】

これは、学位取得に必要な論文を作成するための能力を養うためのものである。受講生は、指導担当教員のもとに専門学問領域における最新の研究課題に取り組むとともに、発表・討論能力を学び、論文作成の指導を受ける。

自己点検・評価：本専攻のカリキュラムは、専攻設置の理念を達成するにふさわしい内容となっている。特に、専攻独自の科目は高い医療・臨床スキルを持つ薬剤師に必須の内容を持ち、これに医学博士課程で開講される科目群を補完させている。これにより、すべての科目は、6年制学士課程教育を終えた学生が学ぶ博士課程に適したものとなっている。

なお、カリキュラム関連資料として、「履修モデル」、「博士論文の研究テーマ」および「教育課程等の概要」を本評価書の最終ページ以降に貼付した。また、評価書を掲載したウェブサイトのページに「薬学専攻シラバス」を別ファイルとして添付した。

○ 博士論文の研究を推進するための医療提供施設との連携体制

本学では、従来の薬学、医学、および保健学の3つの学部が学士教育（医薬保健学域）から大学院教育（医薬保健学総合研究科）まで同一の組織を形成している。これに大学附属病院が加わることにより、学内のすべての“医療系部局”の連携が確立され、薬学専攻の学生へ総合的な医療関連教育が提供される。それと同時に、医療に関わる課題を設定した博士論文研究の指導が行われる。さらに、薬学専攻は薬剤師関連の地域医療関連諸団体と密な連携体制を組んでおり、基礎薬学から臨床薬学・医療薬学まで多様な専門領域における博士論文研究が可能になっている。

特記事項：金沢大学は、石川県薬剤師会等と連携して平成15年に保険薬局「アカンサ薬局」を設立し、NPO法人として運営している。本薬局は学士課程教育における実務実習の場として利用される一方、地域の薬剤師や医師らとの連携を深める場となり、本薬局を拠点とした地域医療に貢献するための臨床研究の実施が予定されている。このような取組みを通じて、本専攻の博士論文研究の質と量を高めることが可能である。

○ 学位審査体制・修了要件

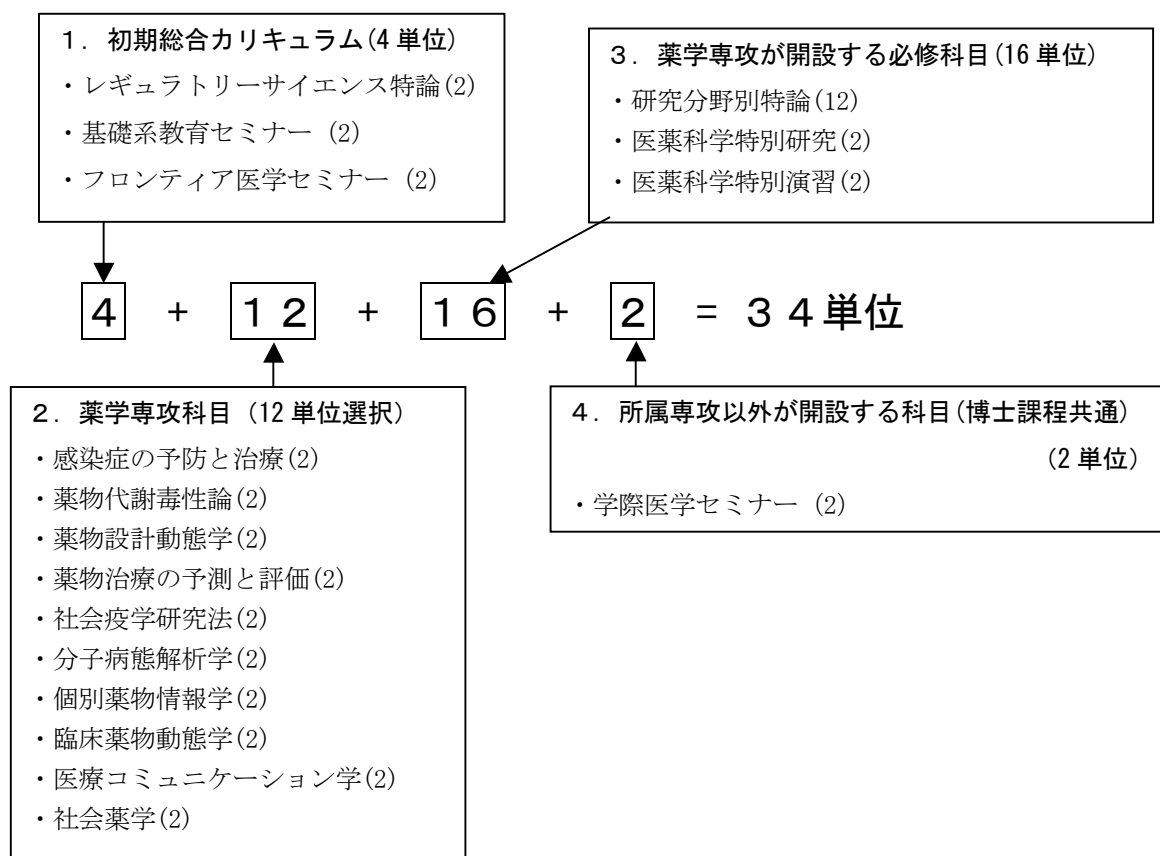
本専攻における学位審査体制および修了要件は以下の通りである。

- ① 研究科に4年以上在学し、初期総合カリキュラム4単位以上、薬学専攻選択科目12単位以上、薬学専攻必修科目16単位、および所属専攻以外が開設する科目（博士課程共通）2単位以上を修得し、さらに、1編以上の参考論文を付して提出した学位論文が薬学系領域委員会で合格と判定された者が修了できる。なお、参考論文とは、学位論文の内容を主たる記述とし、在籍期間内（学位論文の判定委員会の開催日まで）に査読付きの学術雑誌に採択又は掲載された原著論文を指す。
- ② 研究科に3年以上在学し、初期総合カリキュラム4単位以上、薬学専攻選択科目12単位以上、薬学専攻必修科目16単位、および所属専攻以外が開設する科目（博士課程共通）2単位以上を修得し、さらに、優れた業績をもって提出した学位論文が薬学系領域委員会で合格と判定された者が修了できる。なお、優れた業績をもつとは、参考論文を2編以上有するかまたは特に優れた1編の参考論文を有し、かつ専攻長の推薦を受けて薬学系領域委員会で認められた場合を指す。

○ ディプロマポリシー

本専攻では、高度で学際的な医療・臨床系講義を実施すると同時に最新の医療薬学関連研究の指導を行うことにより、高度な専門性と優れた研究能力を有する薬剤師あるいは薬学研究者を養成する。修了にあたって到達度を判定するため、定められた単位の取得に加え、研究成果を記述した学位（博士）論文の作成と口頭発表が求められる。さらに、学位論文に記載された研究成果が審査付きの学術誌に公表されることが必要である。これら全てに合格して本専攻を修了する学生には、博士（薬学）または博士（学術）が授与される。

カリキュラム関連資料 1 : 履修モデル



カリキュラム関連資料 2 : 平成24年度入学生の博士論文研究テーマ

- プロスタグランジン輸送体の生理機能に関する研究
- 抗がん剤の副作用予測に基づく支持療法の最適化
- 体内尿酸調節機構に関する研究
- 小腸におけるUDP-グルクロン酸転移酵素の発現とその役割に関する研究
- トリアジンの特性を活用した新規反応剤の開発とその応用研究
- フルタミドおよび関連化合物の光化学反応
- 在宅医療で薬剤師が行う患者症状アセスメントツールの開発

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|---------------------|-------------|---------|-----------|---|---|---|------|---|---|---|---|---|-----|----|---------------------|----|
| 薬学専攻 | 血管病態制御学 | 臓器機能制御学特論 | 1～2通 | 12 | ○ | | | | | | | | | | 兼1 | 循環医科学専攻と薬学専攻で同時開講する | |
| | | 循環器病学 | 1・2前or後 | 4 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼2 |
| | | 内分泌代謝学 | 1・2前or後 | 8 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼1 |
| | | 血管発生発達病態学特論 | 1～2通 | 12 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼1 |
| | | 小児血液腫瘍学 | 1・2前or後 | 4 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼1 |
| | | 先天性代謝病学 | 1・2前or後 | 4 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼1 |
| | | 小児科学 | 1・2前or後 | 4 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼1 |
| | | 経血管診療学特論 | 1～2通 | 12 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼1 |
| | | 放射線診断学 | 1・2前or後 | 4 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼2 |
| | | 血管内治療学 | 1・2前or後 | 4 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼2 |
| | | 磁気共鳴診断学 | 1・2前or後 | 2 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼2 |
| | | 画像診断学 | 1・2前or後 | 2 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼2 |
| | | 心肺病態制御学特論 | 1～2通 | 12 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼4 |
| | | 心血管外科学 | 1・2前or後 | 6 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼4 |
| | | 呼吸器外科学 | 1・2前or後 | 6 | ○ | | | | | | | | | | | | 兼4 |
| 小計 (15科目) | — | 0 | 96 | 0 | — | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 兼12 | | | |
| 機能分子医薬学 | 分子情報薬理学特論 | 1～2通 | 12 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | 循環医科学専攻と薬学専攻で同時開講する | |
| | 細胞シグナル伝達学 | 1・2前or後 | 6 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | | |
| | 細胞分子機能学特論 | 1・2前or後 | 12 | ○ | | | | | | | | | | | 兼2 | | |
| 小計 (3科目) | — | 0 | 30 | 0 | — | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 兼2 | | | |
| 血液情報病態学 | 血液情報病態学特論 | 1～2通 | 12 | ○ | | | | | | | | | | | 兼2 | 循環医科学専攻と薬学専攻で同時開講する | |
| | 血液異常治療学 | 1・2前or後 | 6 | ○ | | | | | | | | | | | 兼2 | | |
| | 血液情報分子遺伝学 | 1・2前or後 | 6 | ○ | | | | | | | | | | | 兼2 | | |
| 小計 (3科目) | — | 0 | 24 | 0 | — | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 兼2 | | | |
| 医薬情報統御学 | 医薬情報統御学特論 | 1～2通 | 12 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | 循環医科学専攻と薬学専攻で同時開講する | |
| | 薬物間相互作用論 | 1・2前or後 | 6 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | | |
| | 薬物療法科学 | 1・2前or後 | 6 | ○ | | | | | | | | | | | 兼2 | | |
| 小計 (3科目) | — | 0 | 24 | 0 | — | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 兼2 | | | |
| 医療経営学 | 医療経営学特論 | 1～2通 | 12 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | 循環医科学専攻と薬学専攻で同時開講する | |
| | 医療安全管理学 | 1・2前or後 | 2 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | | |
| | 医療マーケティング | 1・2前or後 | 2 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | | |
| | 医療経営学 | 1・2前or後 | 2 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | | |
| 小計 (4科目) | — | 0 | 18 | 0 | — | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 兼1 | | | |
| 医薬科学 | 感染症の予防と治療 | 1・2・3・4前 | 2 | ○ | | | | 1 | | | | | | | | 隔年開講(偶数年度) | |
| | 薬物代謝毒性論 | 1・2・3・4後 | 2 | ○ | | | | 1 | | | | | | | | 隔年開講(偶数年度) | |
| | 薬物設計動態学 | 1・2・3・4前 | 2 | ○ | | | | 1 | | | | | | | | 隔年開講(奇数年度) | |
| | 薬物治療の予測と評価 | 1・2・3・4後 | 2 | ○ | | | | 1 | | | | | | | | 隔年開講(奇数年度) | |
| | 社会疫学研究法 | 1・2・3・4後 | 2 | ○ | | | | | 1 | | | | | | | 隔年開講(偶数年度) | |
| | 分子病態解析学 | 1・2・3・4前 | 2 | ○ | | | | | 1 | | | | | | | 隔年開講(偶数年度) | |
| | 個別薬物情報学 | 1・2・3・4後 | 2 | ○ | | | | 1 | | | | | | | | 隔年開講(奇数年度) | |
| | 臨床薬物動態学 | 1・2・3・4前 | 2 | ○ | | | | 1 | | | | | | | | 隔年開講(偶数年度) | |
| | 医療コミュニケーション学 | 1・2・3・4後 | 2 | ○ | | | | | 1 | | | | | | | 隔年開講(偶数年度) | |
| | 社会薬学 | 1・2・3・4前 | 2 | ○ | | | | | | 1 | | | | | | 隔年開講(奇数年度) | |
| | 研究分野別特論 | 1～3通 | 12 | | | ○ | | 6 | 3 | 1 | | | | | | 兼1 | |
| | 医薬科学特別演習 | 4通 | 2 | | | ○ | | 6 | 3 | 1 | 2 | | | | | 兼1 | |
| | 医薬科学特別研究 | 4通 | 2 | | | | ○ | 6 | 3 | 1 | | | | | | 兼1 | |
| 小計 (13科目) | — | 16 | 20 | 0 | — | | 6 | 3 | 1 | 2 | 0 | | | 兼1 | | | |
| 専攻共通 | 先端循環医科学セミナー | 1・2前or後 | 12 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | 循環医科学専攻と薬学専攻で同時開講する | |
| | 循環医科学Up-to-dateセミナー | 1・2前or後 | 2 | ○ | | | | | | | | | | | 兼1 | | |
| 小計 (2科目) | — | 0 | 14 | 0 | — | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 兼1 | | | |
| 合計 (98科目) | | — | 16 | 411 | 0 | — | 6 | 3 | 1 | 2 | 0 | | | 兼54 | | | |
| 学位又は称号 | 博士 (薬学), 博士 (学術) | | | 学位又は学科の分野 | | | | 薬学関係 | | | | | | | | | |

設置の趣旨・必要性

I 設置の趣旨・必要性

21世紀を豊かに生きて行く上で、環境と人類の健康との関連を研究する研究者、研究心旺盛な医師・医療人を養成することが強く求められている。また、医療資源（人材と研究者）を提供する大学院には、このような国民の重要な要求を予測して、これに迅速かつ十分に対応できる教育研究体制の高度化及び目的を明確にした教育研究体制の整備が求められている。これらの社会的要請は今後ともさらに強まることと予想され、より一層の研究開発や人材の育成が望まれるが、そのためには医学・薬学及び保健学の領域を超えての協力体制・組織構築が必要である。

一方、医学系研究科においては、医学、薬学、保健学の最先端の高度な専門性を確実に担保しつつ、教育資源の共有と人的交流を図り、真のトータルケアと最高のチーム医療を担える人材を養成すること、及びこれまでの学問的実績と有形無形の知的資源をもとに、基礎研究、共同研究、学際研究、応用研究、探索型研究、臨床研究を展開して、国民・人類の健康と地域・国際社会に寄与することを目的として、平成22年度に薬学系博士前期課程（創薬科学専攻）を自然科学研究科から移行・設置した。

これらの社会的要請への対応及び目的のさらなる遂行、生命科学研究の医学への幅広い貢献、高度先進医療開発への貢献、環境健康科学への総合的な貢献、幅広い視野で医療や企業に貢献できる人材の育成を目的として、医学系研究科を廃止し、新たに薬学系博士後期課程（創薬科学専攻）及び薬学博士課程（薬学専攻）を加えた「医薬保健学総合研究科」を設置する。

なお、今回の薬学系2専攻の設置については、平成18年度の学校教育法及び薬剤師法の改正による、薬学教育制度の変更に伴う平成22年度の博士前期課程（創薬科学専攻）の設置の際、教育課程の編成において既に計画されていたものである。これにより、教員組織、学士課程及び大学院課程の教育組織の統一が図られ、学士から博士までの一貫した教育課程が完成する。

また、これまで薬学系の博士後期課程教育は、自然科学研究科において理学・工学系と一体となって教育研究を行ってきており、その成果は21世紀COEにおいて「環日本海地域の環境計測と長期・短期変動予測」拠点プログラムとして採択されるなど一定の成果を上げてきたが、上述のとおり薬学と医学が高度に連携した研究教育が社会的に強く求められてきている状況を踏まえ、2年前（平成22年度）の創薬科学専攻（博士前期課程）の設置に引き続き、今般、創薬科学専攻（博士後期課程）及び薬学専攻（4年制博士課程）の設置においても医学系の研究科である医薬保健学総合研究科の専攻として整理するものである。

○薬学専攻の設置

本専攻は、薬学関連科目のみならず薬学と深く関連する最新の医学系学問をより幅広く学ぶことを可能とし、先進的薬物療法に資する医療薬科学を統合した教育・研究内容により、分子創薬や遺伝子創薬などの未来型創薬科学のための薬剤作用機序に精通し、臨床現場での実践的な活動および学術的な知識や研究能力を体系的に修得することを通じて、医学系、薬学系、医療系大学・大学院、国内・国外医療関連機関、官公庁、医学・薬学・総合医療関連の民間企業において、医薬品開発から臨床評価や臨床での起こりうる問題に対処できる人材を養成することを目的として設置する。

II 教育課程編成の考え方・特色

本研究科は、修士、博士前期、博士後期、医学博士（4年制）及び薬学博士（4年制）の5課程10専攻で構成され、環境と人類の健康との関連を研究する研究者及び研究心旺盛な医師・医療人の養成という社会的要請に応えるため、真のトータルケアと最高のチーム医療を担える人材の養成、国民・人類の健康と地域・国際社会への寄与、環境健康科学への総合的な貢献などを目的としているものであり、各専攻においては、当該専門領域に係る学術的知識や研究能力等を体系的に修得できるようなカリキュラムが構成されている。

医学博士課程は、脳医科学・がん医科学・循環医科学・環境医科学専攻という目的重点型の4専攻からなり、世界水準の研究を展開できる拠点形成を行い、生命医学の各分野において、高い識見と世界的な広い視野で活躍し、世界のリーダーとなる研究者及び医療人を養成することを目的としている。

また、複数の教員による指導体制、上級生が下級生を指導するシニアチューターシステム、国際学会での発表や国内外での研修の奨励により、広い学識と優れた指導能力を有する世界的医科学研究者を育成し、修了には、医科学研究者、高度先端医療人として自立して活動するために必要な能力とその基盤となる学識を身につけていることが必要となる。

なお、がん医療の担い手となる高度な知識・技術を持つがん専門医師及びがんに関わるコメディカル等、がんに特化した医療人の養成を行うために「北陸がんプロフェSSIONナル養成プログラム」を大学院特別コースとして設けている。

○薬学専攻の教育課程編成の考え方・特色

1) 本専攻では、学士課程（6年制）で薬剤師としての基礎的な知識・技術を修得していることを前提に、医療人としてより高度で学際的な講義を実施するとともに、担当教員の指導のもとに最新の医療薬学関連の研究に取り組みせることにより、学生は医療の現場における臨床的な課題を対象とする研究領域を中心とした高度な専門性や優れた研究能力を有する薬剤師としての礎を築くことができる。

2) 本専攻では、「初期総合カリキュラム」および「薬学専攻選択科目」のうち科目区分「医薬科学」以外の科目は、医学系の科目から自由に履修できるものとし、薬学と深く関連する最新の医学系学問をより幅広く学ぶことができる。特に、専攻共通科目の「循環医科学up-to-dateセミナー」については、セミナーの案内毎に積極的な受講をすすめ、医学の知見修得を奨励し、薬学系人材養成の在り方に関する検討会で報告されている「医療の現場における臨床的な課題を対象とする研究領域を中心とした高度な専門性や優れた研究能力を有する薬剤師」の養成に資するものである。さらに、学会への積極的な参加を促し、「先端循環医科学セミナー」では関連学会での発表についても単位認定の対象とし、常に新しい知識を求めて学習に研鑽する習慣を涵養する。また、「薬学専攻選択科目」のうち科目区分「医薬科学」では、薬学系の教員による専攻科目を10種類(20単位)用意し、キャリアパスを考慮した最先端の知識を習得させ、臨床現場での実践的な活動および学術的な知識や研究能力を体系的に修得することができる。例えば、薬物代謝の研究情報や活性代謝物の挙動や免疫の関与などを学ぶ「薬物代謝毒性論」により、薬物代謝に関する最新情報を得ることはもとより、広範な研究アプローチとその結果についての考察力を身につけることができる。このほか「博士課程共通科目」では、所属専攻以外のセミナー・講義・実習等を行い、幅広く最新の医学系学問を学ぶことを可能とする。「薬学専攻必修科目」のうち、研究室セミナー・カンファレンス等に相当する「研究分野別特論」、学位申請のための論文作成を目的とする「医薬科学特別研究」並びに学会発表等について実践的な演習を行う「医薬科学特別演習」により、学生は指導担当教員のもとに専門学問領域における最新の研究課題に取り組むことができる。

| 修了要件及び履修方法 | 授業期間等 | |
|--|--------------------|------|
| (修了要件) 4年以上在学し、34単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、当該課程に3年以上在学すれば足りるものとする。 | 1学年の学期区分 | 2 学期 |
| (履修方法) 博士の学位を受けるには、以下34単位以上を修得することとする。 | 1学期の授業期間 | 15 週 |
| ①初期総合カリキュラム 4単位以上 ②薬学専攻選択科目 12単位以上 ③薬学専攻必修科目 16単位 ④所属専攻以外が開設する科目 2単位以上 (博士課程共通) | 34単位以上 1時限の授業時間 | 90 分 |

(注)
1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
2 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合